

投資は楽しいもの



野村証券株式会社 投資情報部長
竜 沢 俊 彦 CMA

証券界に身を置き既に30年以上の歳月が流れた。

思い返せば、1986年からの資産バブル相場のスタートとともに証券マンとしてのキャリアを踏み出し、ダイナミックかつチャレンジングな時代を過ごすことができた。また、個人投資家から金融機関、海外機関投資家・年金まで幅広い投資家層とビジネスをさせていただいた。

この間の、株式投資をめぐる環境変化は目覚ましいものがある。

入社当時、証券会社に聞くしかなかった株価が、いつでも誰でも簡単にスマートフォンで見られるようになり、マネー雑誌が書店の一角を占め、日経新聞にとどまらず一般紙においても「マネー特集」が日常的に生まれ、株主優待生活で世間の注目を集める方も現れるなど、隔世の感がある。

しかしながら、これほど見た目の株式投資の「民主化」が進んだにもかかわらず、個人金融資産に占める株式の割合は、残念ながら価格変動に伴う上下動を差し引けば依然として低位にとどまったままである。

これはいったいどうしてなのだろうか。

「それこそ証券会社の責任だろう」というお声が聞こえてくるのは承知の上で、私の思いをお伝えしたい。

失われた20年（もしくはそれ以上？）という下げ相場の中で、株式投資はややもすると「怖い／望ましくない投資対象」となったという面